

鷹の目の狩人

XXI

精緻を極めた色の道、 染色の道

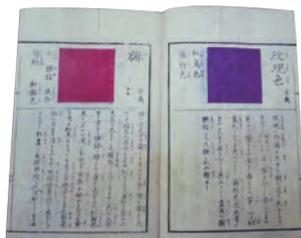
しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原 道晴

色と言えば、錦絵の落ち着いた、時に鮮やかな多色美を、さらに版画家、鬚嘔 (AY-O) の虹のような色のハーモニーを思い出す。光のあるところ色は満ち溢れている。印刷インキを職業として数十年、色に魅せられた一人として骨董業界で色を集めてきた。



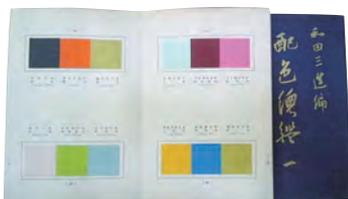
色の魔術師 AY-O のシルク
スクリーン版画

明治8年(1875年)に刊行された『色図の分け』には光の分解7色と黄紅藍3原色、混色の中間色について述べられ、木版で7原色と39混合色の見本が印刷されている。昭和9年(1934年)には全6冊の『配色総鑑』が編纂され、色彩の配合調和が人の心を左右すると色の役割について確信を得ている。この本は色彩の配合について基本原理から解説



明治8年『色図の分け』
木版色見本

し、色票が348色添付され、平仮名、漢字、英語で色名が表示されている。色票はすべて別刷り貼込で、再現された色数は816色に及ぶ。昭和18年(1943年)には『日本色名大鑑』が3千部刊行され、とても戦中と思えない出来栄で、5カ月後に4千部再版されている。色票は貼込でなく、1頁に色票1色という豪華石版印刷で、しかも退色に配慮し、すべての頁に色票より小型の黒マスクがこれも1頁ごとに合わせ製本されている。色数は使用原色が白黒合わせて8色、再現色票は82色で、黒マスクに色名と解説が表示される。一つの色を5分以上見ないとか使用上の注意も詳細である。紙もインキも不自由なときによく完成されたと感じざるを得ない。戦後は昭和34年(1959年)、日本規格協会JIS色票委員会がJIS規格「Z8721-1958色の三属性による表示方法」に基づき『標準色票』を完成させた。色票はすべて別刷り貼込で、40の色相について明度、彩度各段



昭和8年『配色総鑑』6冊の内の
1冊

階の小片が30~40片貼り込まれている。価格は昭和36年(1961年)版で25,000円。細密な仕上がりに感激である。これは今も内容が変わらず、第9版となり、1,733色で日本規格協会から172,800円で販売されている。価格はともかく、色の正確性に、基本に忠実な日本人の素晴らしさを感じざるを得ない。

色に感激し、色見本帳を集めていたとき、印刷と双壁をなすように存在したのが、かつての日本の基幹産業である絹であった。つまり、染色見本帳である。世界遺産・富岡製糸場は休日には5千~6千人の人出で賑わっている。こちらにも安中の碓氷社の養蚕資料が多く残されている。今回紹介するのは養蚕からではなく、色から見たコレクションである。

明治10年(1877年)の手書きの『染色見本帳』は79色で色名が書かれている。明治23年(1890年)の『新発明実地経験染色法』は基本色9色、混合色22色が木版で描かれ、各色の染上げ法が詳細に記述される。明治34年(1901年)の『実業教育通俗染色要法』には絹染色法として、絹の性質、精錬法、漂白法、浸洗法と16色の糸染色見本が添付されている。染色見本帳は戦前から出ており、豪華絢爛といえる。『王朝の彩飾』は昭和44年(1969年)、折丁、タトウ入り、染色見本女官芳抄より60色、春55色、夏26色、秋74色、冬14色、雑51色、伝統色48色が切貼りされている。『色彩範』も豪華本で、1,334色切り貼り、『新能衣調』は能衣装ごとの染色糸180色が収納されている。『光栄』『ほまれ』も染色見本帳で各130,195色切貼りされている。ドイツのバイエル、カセラ等染料メーカーの染料もベッカ商会、カールローゼ商会、グロッセル商会等、横浜商社から輸入され、色標本も紹介されていた。



明治23年『染色法』木版
色見本

これらの印刷、染色見本帳が素晴らしいのは色に対するこだわりである。単に色を印刷したわけではない、すべて別刷り貼込みである。数千枚に及ぶ小片の貼込みは今では難しい。その真摯な対応に感謝したい。今回は印刷グッズの一端として集めて来た収蔵品を紹介した。知らない資料も多くあると思われる。色は人に喜びも悲しみももたらす。うまく色と共生していただきたい。

これら

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH